
Angel Beats! ~ 一人の決意の物語 ~

桐生 乱桐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! ～一人の決意の物語～

【Nコード】

N9788U

【作者名】

桐生 乱桐

【あらすじ】

これは、一人の少年が決意し、学園都市へ戻るまでを描いた物語

P r o l o g

ふと、目が覚めた

目が捉えるのは、空に点々と輝く星の煌めき

肌が感じるのはほんのりと寒気が混じったような風の音

「…ここ、は…？」

むくり、と上半身を起こして辺りを見回す

学校だろうか

結構大きい、だが人の気配はあんまりない

現在の天候は夜

まあ先ほど述べたからわかってると思うのだが

少年——鏡祢アラタ——は改めて現在の自分を確認する

「あれ、俺こんな白い服着てたかな…、この帽子も…。けどやな感じはしないな」

アラタは立って周りを見る

「あら、起きたみたいね」

すると急に自分ではない女の声が耳に聞こえてくる

アラタがそちらを向くと朱色の髪が特徴的な女の子が立っていた

長袖のブレザーに、長過ぎず、短過ぎないスカート

年は自分よりも一つくらい年上か

「ようこそ——」

女性はこちらに向かって手を伸ばし

「——死んだ世界戦線へ」

そう告げた

なんかかなりスケールのデカイ話に、俺の思考は付いていけず

「…はい？」

そう素っ頓狂な声を出していた

これは、まだ俺がスカルになる前の物語

見習いみたいな、クリスタルだった頃の、ストーリー物語

E p i s o d e 1 死んだ世界戦線 前編（前書き）

鏡祢アラタ

お前がこの世界で何を学ぶのか

見させてもらおうか（蒼崎燈子）

Episode 1 死んだ世界戦線 前編

「ちょ、ちよつと待ってくれ!」

思考回路が追いつかないアラタは少女に問いかける

「死んだ世界戦線って、どういう事だよ!？」

「名前の通りよ。貴方は死んだの」

さらに訳がわからない

「死、んだ…?」

アラタは振り返る

いつ自分は死んだのだろう

…たしかテレスティーナが仕掛けた罠を解除する為に一人最下層に残って…

…なんか曖昧だ

「唐突だけど、貴方。「入隊」してくれないかしら」

少女が腕を組みながらアラタに言う

「は？ 入隊？」

「さっきも言った通り、ここは死んだ後の世界。何もしなければ消されるわよ」

消されるとはまた物騒な

「消される、て…誰に」

「そりゃ神様でしょう」

いるんだ神様

…式がいたら間違いなく喧嘩を売るだろう

「じゃあ、入隊ってのは」

「死んだ世界戦線よ。…まあ部隊名はよく変わるけど」

「…なんとか、戦うのか？」

その疑問に少女はさも当然のように答える

「天使よ」

「…、」

大丈夫かこの世界

「とりあえず、その辺歩いていいかな」

アラタがそんな事を言っていると少女はくあ！ と表情を変えて

「はあ！？　なんでそんな思考に辿り付くの！？　バツカじゃないの！？　いつぺん死んだら！？」

恐ろしい勢いでまくし立てる少女に、アラタは白井黒子を思い出してしまった

「…ちなみに、「いつぺん死んだら」っていうのは、死ねないこの世界でよく使われるジョークなんだけど、どう？　笑えるかしら」

笑えません

「と、とにかく、世界に順応するには、まず世界を知らないといけないと思ってさ…」

一理あるのか少女は「むむ…」と唸ってしまった

「けど、いつ天使が現れるかわかんないわよ？　それでもいいの？」

「大丈夫。逃げるのは慣れてるから」

最後にそう告げてアラタは少女の隣を通り過ぎた

「ゆりっぺー！」

背後から声が聞こえた

少女―ゆり―は後ろを向く

そこにはいたのは青い髪が特徴的な少年、日向と同じく赤みがかつた髪の少年、音無だ

「勧誘はどうなったんだよ」

音無の問い掛けにゆりは

「あっち行っちゃった」

彼が歩いていった方を指差した

「ええ！？ ちょっとゆりっぺ、大丈夫なのかよ！？」

「今日は天使の出現も確認されてないし、よほどの事がない限りは大丈夫よ。…多分」

若干投げやりに答えるゆりに対し音無は

「多分を止める。不安になるから」

音無の不安そうな声色

「大丈夫よ。音無くんみたいな事にはならないだろうから」

「悪かったな…！」

音無も先ほどの少年と似たようなケースでこの世界に来たのだ

記憶を無くした状態で

当然音無も同じように勧誘された

だが想像して欲しい

物陰に隠れ、スナイパーライフルで一人の少女に狙いをつけてる物
騒な女を信用できるだろうか

おまけにタイミング悪く同じようにライフルを構えた日向が走って
きたものだから胡散臭さ満載だ

結果、音無は狙われていた少女に危険を伝えようと足を運んだのだが
少女に近づいて狙われていた事と「天使」だという事を少女に知らせたのだが…

「そのあと音無くんは刺されてしまいましたー」

「うっさいんだよゆり」

そう、刺されてしまったのだ

もちろん、ちゃんと順序がある

前述の通り知らせ、狙われた少女が天使でないとわかると病院に行こうとした

しかし狙われた少女がいった

この世界に病院なんかない、誰も病まないから

さすがに憤慨した音無はだつたら証拠を見せてみる、と言った瞬間に目の前まで迫ってきた少女に心臓を刺された――

「とまあ、回想はこれくらいにして、勧誘しようとしてたヤツはどうすんだ？」

話題を変えようと音無がそんな事を言う

「少なくとも、明日までには勧誘したいわね。そして、明日は皆やつてる簡単なオペレーションに、音無くんと一緒に出てもらう、というのが私なりの予定なんだけど」

ゆりが簡単に説明する

「なるほどな。ま、妥当だと俺は思っけど？」

日向がゆりの意見を肯定する

「よし、んじゃあ今日はこの辺で、帰るとしましょう」

鏡祢アラタは宛もなく学校を歩いていた

「…何もない」

校内を歩いていたらコンピュータールームが開いている事に気がついた

そこでこの学校について調べてみたのだ

「生徒総数二千人、全寮制…天上学園、か…」

自分が通っていた高校の何倍の生徒数だ？

「…流石にこの世界については、何もわからずじまいか…」

元から期待なんてしていなかった

あとは明日あの女性とコンタクトを取って必要と感じたならその【戦線】とやらに入隊しよう

うん、あとの事は明日だ

「そして…」

アラタはどこからともなく、一つのドライバーを取り出す

どこことなくし字に見えるそのドライバーの名前は【ロストドライバー】という

そしてスーツの懐からは一本のメモリ

そのメモリには【S】の文字が刻まれている

その【S】はどことなく骸骨の横顔に見えなくもない

「…これが今の俺の変身ツール、でいいんだよな？ ガタツクゼクターはあの爆発の時壊れちゃったし…」

実際は壊れた訳ではないのだが

「…俺に、左のダンナの師匠のメモリなんて使えるのか？」

不安はあった

今までは多少ではあるがゼクターの力添えもありそれなりに戦えていた

しかしメモリはどうだろう

自分は上手く扱えるのか、鳴海壮吉の名を汚してはしないだろうか
プレッシャーが押し寄せる

「…いや、悲観になっちゃダメだ」

アラタはすく、と立ちながら呟く

「今は、明日を見る事に集中しないと」

とりあえず今日はコンピュータールームにて睡眠を取る事にした

「…朝か」

その辺の椅子に座り睡眠を取ったアラタは立ち上がり、コンピュータールームを後にした

アラタは歩き回って校長室の前に来ていた

「校長室、か」

なんの気なしに校長室の扉のドアノブに手をかけて、ひねり、回して扉を開ける

「失礼しま——」

左側に気配を感じた

確認する暇なんてない

アラタは即座にバックステップを取る

その刹那ブォン！！　かなり巨大なハンマーが自分のいた場所を振り子の要領で通り過ぎた

「な、なんだありゃあ…！？」

なんかすごい規模のトラップが通った気がする

とりあえず改めて校長室の敷居を跨ぐ

「失礼しまー…。あれ、昨日の女性」

校長室には昨日の朱色の髪的女性がいた

それ以外にも、体格のいい男性、気弱そうな男性、眼鏡をかけて知的な男性、外人みたいな男性、なんか長ドスもったチンピラみたいな男性、カッコイイハルバートを携えた男性、青い髪の男性に、赤みがかった茶髪の男性、そして気づきにくいが、部屋の隅には、腕を組んだ状態で立っていた女性もいた

唯一、皆ポカンとしながらアラタを見ていたが

「…野田くんのトラップを、避けた？」

気弱そうな男性が呟いた

「…これは、即戦力の期待がありますね」

眼鏡を上げながら知的な男性がそれに答える

「確かに、野田くんのトラップを避けたのは評価高いわね。…そういえば、貴方はどうしてここに？」

主題を持ってこられたので、アラタは

「そうだった。…アンタ、昨日俺を誘ってくれたよな、戦線とやらに」

「え？ ええ。…まさか、入隊してくれるの!？」

女性はキラキラと目を輝かせてアラタを見てくる

アラタはゆっくりと頷き

「ああ。俺を仲間に入れてくれ」

すると周りに『おお…！？』と驚きにも似た声が上がった

「こ、こんなに早く決断するなんて…」

「ああ、異例の速度だぜ…」

口々になんか言われてるが、気にしない

「けど、一つ聞きたい。アンタらは一体何をやるうとしてるんだ？」

聞かれた朱色の女性は真面目な表情を作る

そして口を開く

「…私たちの目的は、天使を消し去って、この世界を手に入れる事」

…、

世界を手に入れる、か

こいつはまた大きく出たね

「ふ、ふふ…。いいじゃないか。ますます入隊したくなった！」

アラタは笑みを浮かべて帽子を人差し指で軽く上げる

「俺の名前はアラタ。よろしくたのむ」

アラタは右手を差し出す

「あら、積極的」

軽く言いながら朱色の女性は手を握り

「私はゆり。この戦線のリーダーよ」

そして一人一人戦線のメンバーを紹介を始める

まず、青い髪の少年

「彼の名前は日向くん。見た目通りちゃんぽらんだけど、やる時はやるのよ」

「ゆりっぺ、フォローになってないぜ…。慣れたけど」

次に体格ががっちりした大柄の男性

「彼は松下くん。柔道五段だから、敬意を込めて皆松下五段と呼んでいるわ」

「よろしくな」

言っけしっかりと握手を交わす

次に気弱そうな男性

「彼は大山くん。特徴がないのが特徴よ」

「ようこそ、戦線へ」

「いえいえ」

大山くんと握手を交わす

すると

「Come on! Let's dance!」

「わわ…!?!」

いきなりでビックリした

赤いバンダナを巻いた外人のような男性がアラタを見ていた

「この人なりの挨拶なのよ。皆、TKと呼んでるわ。本名は誰も知らない謎の男よ」

「あれ、そんな人が味方で大丈夫なの…?」

ちょっと不安になった

「眼鏡をいちいち持ち上げて知的に話すのが高松くん。本当はバカよ」

「へ？」

「よろしく」

高松が眼鏡を上げながら答える

「あとその長ドス持ってるのが藤巻くん」

「藤巻だ」

言ってニイ、と笑みを浮かべる

「そののハルバートを携えてるのが野田くん。んで、部屋の隅で佇んでるのが椎名さん。あと、陽動部隊のリーダーに、岩沢さんがいるけど、彼女はまた今度にするね。あとはここにいないだけで、学校には何十人と潜伏してるわ」

何気にすごいな死んだ世界戦線

「最後は俺か。俺は音無。入ったばかりだけど、困った事があったら相談してくれ」

「おうよ。そうさせてもらっぜ」

音無とアラタは互いに手を握り握手を交わす

「そつえば、制服は渡さなくていいのか？」

そつ言えば戦線メンバーは学校の生徒とは違う制服を着ていた

彼女たちが反旗を翻す証なのだろう

「そうね、忘れてた。…けど、彼最初から真っ白いスーツ着てるから、目立つと思って。必要なら、用意しようか？」

「…ワッペンだけ、つけてくれないか？ アンタたちの仲間の証をさ」

「おっけー。改めて、ようこそ！ 死んだ世界戦線へ！」

E p i s o d e 1 死んだ世界戦線 中編（前書き）

ちよつと短めな上に無理やりです

Episode 1 死んだ世界戦線 中編

ゆりが窓を開け放ち、拳銃の引き金を引いている

その銃がちゃんと使えるかどうかチェックしているのだ

バン、バンと音が響き渡る

一通り撃つとゆりは振り返って拳銃の砲身を持ち、グリップを音無とアラタに渡す

「はい、二人とも。初めてでも撃てるわ」

音無は軽くいぶかしながらも受け取り

「…効くのか？」

「足を狙いなさい。とりあえず追ってこなくなるわ」

「臨機応変に頑張んなって事か。傷とかは癒えるのか？」

アラタの疑問にゆりは

「そっというのは経験して覚えていきなさい。私達もそうしてきたんだから」

最もな意見だ

「…じゃ、生き残るために頑張りますか、な。音無」

「…良いだろう」

音無がそう返事すると同時、部屋の電気が落とされた

ゆりは天井から何かを引っ張り、プロジェクターを起動させ、それに写す

いくつか置いてあるパソコンが起動し青白い光を放つ

ゆりは気合をいれるように、白いベレー帽を被り

「良い返事ね、二人とも。まず貴方たちに慣れてもらうために、いつもやっている簡単な作戦に参加してもらおうわ」

ゆりは軽く視線を鋭くさせて、その作戦名を口にする

「その名も、オペレーショントルネード」

「ええ…！？」

と大山くんが驚き

「こいつはデカイのが来たな…」

と松下五段が呟く

トルネード、というのだから…

アラタは自由に妄想してみる事にした

トルネードというからには、やはり何か重武装で台風みたいな突風の中に突っ込むのだろうか

いやいや、あるいは…

自由に妄想するアラタを尻目にその作戦の実態をゆりが説明する

「生徒から食券を巻き上げる!!」

「トルネードってそういう意味なんですか!?!」

予想の斜め上に行く返答にアラタは驚愕しツッコんだ

「巻き上げるってなんだよ!?! まさか、イジメとかか…!?!」

「まさか。ま、文字通り巻き上げるのだけれど」

ゆりは手慣れた様子でパソコンを操作して、学校全体をCGで再現

した映像を表示させ

「いい？ 貴方たちは『天使』の進行を阻止するバリケード班。作戦ポイントである食堂を取り囲むようにそれぞれ指定位置で武装待機。安心しなさい、二人は楽なところに置いてあげる。細かい位置はあとで大山くんか高松くんに確認を取って」

すると今度はソファに座ってた赤みがかった短髪の女性に声をかける

「岩沢さん。今日も期待してるわ」

「ああ」

なるほど。この人が陽動班のリーダーなのか

「『天使』が現れたら各自発砲、それが増援要請の合図になるわ。どこかで銃声が聞こえたら、二人も駆けつけるように」

「…わかった」

「了解した」

音無とアラタが返事をするのを確認し

「作戦開始時刻は、ヒトハチマルマル！ …オペレーション、スタート…」

ほどなくして、作戦が開始された

……………

学園大食堂

その外部

大山くんから教えてもらった所定ポイントにアラタと音無は配置され、立っていた

「…この作戦で、一体どうやって食券を平和的に巻き上げようってんだ…？　なあ、アラタ」

「俺に聞かれても。…成り行きを見守るしかないさ」

しばらく待機していると大食堂からライブが始まった

それは透き通るような歌声で、誰しもが聞き入ってしまう音色

（…なるほど…。こいつは平和的だ）

思わずアラタが聞き入ってしまったていると

青白い照明が二人を捉える

そちらの方を向くと

いた

二人のだいたい五十メートル先に銀髪の『天使』が

「っ！？」

音無が慌てた様子で銃を構える

「…現れた」

「みたいだな…」

その姿は少女と言うに相応しい出で立ちでどこにでもいる普通の女の子だ

その少女がここに現れたという事は…

「…今の戦線の弱点を、見極められたって事か」

「か、完全に見くびられてるって訳かよ…！ くっそ…、舐めやがつて…！ 撃つてやる…！」

改めて音無が構える、が

「け、けど、あんな華奢な女の子を…！？」

「割り切れ音無。…撃たなきゃ殺られる」

言うや否やアラタはハンドガンを少女の方に向けて

一気に引き金を引く

バンっ！ と音がほとばしり、少女の体を貫いた

しかし少女は全く止まらない

腹部を赤く染め、少女は軽くこちらを見る

「…嘘だろ。腹に当たって、なんで止まらないんだ」

流石にアラタは焦りを覚え、音無と一緒に後方に下がり、音無が牽制気味に一発撃つ

しかしやはり効果はない

それどころか

「《ガードスキル：ハンドソニック》」

少女は半透明な鋭い刃を右手に生成したのだ

「おいおい、マジかよ！」

これはヤバい

本能がそう告げている

しばらく下がり続けて距離を取る

『天使』はゆつくりとこちらへ近づいてくる

その表情を一切変える事なく

闇夜に照らされたその瞳は天使というよりは

「…死神だなアイツは…！」

思わずアラタが愚痴る

「ど、どうすんだよ…！」

音無がそんな事を言った直後だ

突然宙空からハルバードがブーメランのように投げられた

それは野田のものだ

「ちい、外したか！」

野田を筆頭に次々と戦線メンバーが駆けつける

「待たせたな！」

「日向！」

「一番弱いトコ突かれたんじゃないか！？」

「藤巻！」

大山が柱に隠れ、スナイパーライフルを構えながら

「まだハンドソニックだけだよ！」

『天使』に狙いを定めながら言う

「広い場所へ！」

「後退しながら、多重攻撃！」

日向と松下五段が鋭い指示を飛ばす

「行くぞ……！」

日向が合図を取る

しかし『天使』は撃たれるより先に何かを呟いた

「《ガードスキル：ディストーション》」

『天使』の体が何かに包まれた

「撃てえ！」

日向の指示と同時に、一斉に戦線メンバーが持っていた銃器が火を吹く

だが『天使』には何かバリアのようにその弾丸が当たる事はない

「……何だ、こりゃあ」

誰にも聞こえない音量で、しかしはっきりと鏡祢アラタは呟いた

たった今目の前で起きている非現実

これは時間稼ぎではなかったのか

アラタの隣では同様の事を考えているのか音無も呆然としていた

これが、彼らの日常なのか

そんな時だ

>おい、何をしているく

ただ立っているだけのアラタの脳裏に誰かの声が響いたのは

「っ！？　だ、誰だ…！？」

それは女の声だ

>誰でもいいだろう。それ以上喋ると電波系だと思われるぞく

慌ててアラタは口を閉じる

>なぜ変身しないく

(え…？)

>まだお前にはその力は重いかもしれない。だけどく

言葉が一旦途切れ

> 出来るはずだ。お前ならく

「…、」

アラタは黙る

自分は過去、大切な人を悲しませた事がある

その人は今、泣いてるのだろうか

それはわからない

今アラタに出来る事は

（目の前の事象を乗り越え、前に歩く事！）

アラタはゆつくりと歩み出る

所持していたハンドガンを放り捨て、ただ歩く

「お、おい！ なにやってんだ！」

「アイツ、頭おかしくなったのか！」

音無の心配する声や野田の声が飛んでくる

アラタが歩いて行ったため、銃声が止む

「戻れ！ アラタっ！」

日向がそんな言葉を投げかけてくる

そんな言葉を背にアラタはロストドライバーを腰に装着し、スーツの内ポケットから一本のUSBメモリのようなものを取り出して、>SKULL<

起動させた

そして少年は言う

自分を変える一言を

「変身」

メモリをドライバーにセットして、開く

>SKULL<

直後、ヒュオオ！ と風が吹き荒れる

あまりの突風に思わず腕で顔を隠してしまった

「な、なんだ…！？」

日向がアラタのいた方向を見ると

「…お、おい、あれ…何だ…」

思わず日向は呟いた

それもそうだろう

そこにアラタの姿はなく

黒いボディを身に纏い

純白のマフラーをはばたかせ

骸骨をイメージしたどこか光沢があるマスク

スカルクリスタルがそこにいたのだ

『天使』でさえ驚きのあまり目を大きくさせ立ち止まっていたほどだ
やがてゆっくりと『天使』は口を開く

「あなた、何者？」

スカルクリスタルは悠然と返す

「…俺は、仮面ライダーだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9788u/>

Angel Beats! ～一人の決意の物語～

2011年10月9日08時14分発行